

## 「いつまで迷っているのか」

列王記上 第18章 20節～24節、35節～40節

説教 本庄 侑子 伝道師

「いつまで迷っているのか。」カルメル山で神の迫る声が響きました。人々は、主とバアルの間で迷っていました。バアルとは豊かさや繁栄をもたらしてくれる神のことです。私たちの社会にも、成功や繁栄をうたう言葉や情報が溢れかえっていて、私たちを魅了します。聖書は、私たちがただ豊かになり繁栄すれば良いとは語りません。私たちをお創りくださった神との関係を語ります。プラグをささない電化製品が役に立たないように、創り主なる神につながっていないければ、私たちの人生はどれほど豊かになるうとも意味をなさないからです。

今日の聖書箇所は、バアルの預言者たちと、主なる神の預言者エリヤとの対決シーンです。バアルの預言者たちはバアルの周りで叫び続け、体に剣や槍を刺して踊り狂います。繁栄や成功のためならば、いくらでも熱狂的になり得るということです。しかし、その人生には肝心なのが欠けています。神の声です。私たちに本当に必要なのは豊かさでも繁栄でもなく、私たちを生まれさせてくださった神の声なのです。

神はエリヤをお遣わしになりました。エリヤは、壊された主の祭壇を修復しました。長い間放置されていた礼拝の場所へと人々を連れ出し、礼拝生活を修復させたのです。その後、捧げものの雄牛を整えると、瓶の水を注ぐように命じます。水が注がれた捧げものは、人々の心の状態を表すようでした。どう見ても火のつきような状態。神をおよそ受け入れることのできない心、信仰を失ってしまった水浸しの心。注がれた水の12回という回数が指し示していたのはイスラエル12部族でした。水浸しだったのは一部の人々ではなかったのです。神の目には、ここにいる私たちの全てが水浸しの状態です。

エリヤは静かに祈り始めました。人々の繁栄のためでも豊かさのためでもありません。主こそ神であることが明らかになるように。そしてそのことによって、人々の心が主なる神の元に返ることができるように。ただ、それだけでした。「すると、主の火が降って、焼き尽くす献げ物と薪、石、塵を焼き、溝にあった水をもなめ尽くした。」(38節) どうやっても火のつきようがなかった水浸しの雄牛に、天からの火が降りました。それだけではありません。「それを見た全ての民たちはひれ伏し、『主こそ神です。主こそ神です。』と言った。」(39節) 彼らの心が神の

元に返りました。奇跡が起きたのです。

ここは、かつて神が火をお降しになったカルメル山。主なる神がバアルの空しさを明らかにし、私たちの心に神への信仰の火を燃やし、神を礼拝する心へとお戻しくださる場所です。私たちは今、かつてエリヤと人々が見た天からの火を目にし、そのただ中に置かれています。教会は、祈る群れに天からの聖霊の火が降りて始まりました。神から離れ去った水浸しの地上に、聖霊の力によって神への信仰によって生きる群れが生まれ、聖霊の力によって今日まで立ち続けてきました。

天から降った聖霊の火は、教会に招かれた私たちにも働いて、主イエスのお姿を真っ直ぐに指し示します。主イエスは、このカルメル山上の出来事と重なり合うようにして十字架につけられました。イエス・キリストの十字架の死は、イエス・キリストを降した神こそまことの神であることを示す天からのしるしです。さらに、神はもう一つ、教会に聖餐という具体的なしるしをお与えくださいました。私たちはこれを口にする度に、主イエスの十字架が私のためであったことを思い出します。神に背を向け、水浸しになってしまった心に火が降り、主イエスの命の味が体の中に流れ込んできます。

カルメル山上で迷っていた全ての人々は、天からのしるしを目にしてひれ伏し、信仰を告白しました。私たちもまた、主イエスへの信仰を言い表し、主に従って歩むことがゆるされています。私たちはもう、バアルの前で、叫び、踊り狂うようにして生きなくてもよいのです。神は言われます。あなたの人生は私の手の中にある。私につながっていないさい。あなたの人生を実り豊かなものとして用いるために命を与えたのは、あなたの神である私なのだから、と。

私たちは、実りをもたらすために送り出されます。教会は現代のエリヤ、繁栄や豊かさを求めてではなく、誰かが神の元へと立ち返るようにと祈る群れです。私たちにもエリヤがいたはず。私たちは皆、誰かの祈りの答えとして今日ここにいます。ここから送り出される私たちもまた、エリヤのごとく誰かのために祈り始め、天から降る神の奇跡、天からの実り、祈りの答えを目にすることとなるのです。

(記 本庄侑子)